

『万華鏡ドロップス』

著：弓月あや

ill：明神 翼

「起きてください、イリス様」

目を覚ました瞬間、薄暗がりの中で美しい顔が横に寝ているのは心臓に悪い。

「イリス様、起きて、起きてください」

「……う……、ん。ん。うるさいよ」

伸びてきた長い腕は、素早くんの身体を捕まえて、抱き込んでしまった。その拍子に、寝乱れたイリスの、はだけた逞しい胸元。なめらかな肌が近づく。

(は、肌が……っ)

毎朝、彼の寝姿など見飽きているのに、なにを狼狽えているのか。

「心臓に悪い……」

思わずそう呟いてしまい、唇を手で押さえる。

麗人の寝乱れたしどけない姿に、体温が一気に上がった。んはイリスを起こすのを諦めて、大きな溜息をつき、改めて周りを見回してみる。室内は薄暗いけれど、まぎれもなくイリスの部屋だ。

豪華な調度に、美しく生けられた溢れんばかりの花々。象牙色で統一された室内。なにより天蓋つきの寝台は、使用人が寝起きするものではない。

「また……、やっちゃった」

周りを見回して状況を把握したんは、ぐったりと頭を垂れる。彼の部屋に押しかけて眠ったのは、一度や二度ではないからだ。

ちょっとでも不安になってしまうと、もう駄目だ。なにかうまくいかないことがあると無意識にイリスの部屋を訪れて、彼の寝台に潜り込もうとするのだ。

その癖を知ったイリスは怒りもせずに、受け入れてくれた。

『闇が怖くて眠れないなら、一緒に寝てあげるよ』

その言葉に呆然とするんに、彼は優しく笑うばかりだ。

『だが、寝ているところを起こされるのは、いただけない。特にんは、小さな子供が泣いているような声で「起きて」とやるから厄介だ』

イリスはそう言って、自室の鍵を渡してくれたのだ。ただの使用人の自分に。

抱きしめられていると、胸がドキドキしてくる。

なめらかな白い肌、仄かに香るコロン。落ち着かなくなるのも、無理はない。

思わず大きな溜息をつく、イリスの身体が動いた。

「そう溜息ばかりつかれると、なにもしていないのに疚しい気持ちになってくるな」

その言葉に飛び起きようとする、彼はんを強い力で抱きしめる。もがいても、まったく腕の

力は緩まない。

「離してください。部屋に戻らないと、他の使用人に気づかれます」

「まあ、別になににもないのだから、気づかれてもいいけどね」

とんでもないことを言うイリスに、凧は縫りつくような目を向ける。

「ぼくみたいな使用人とイリス様が疑われるなんて、絶対に駄目です！」

「ぼくみたいとは、どういう意味？」

「ですから、ぼくみたいな黄色人種の使用人が、明け方イリス様の部屋から出てくるなんて、いらぬ誤解を招きかねません。そんな、おぞましいこと、絶対に許されません」

「おぞましいとは、酷い言われようだね」

「もう離してください」

「私は凧が好きだよ。肌が美しく髪がとてもきれいだ。小柄なのもすてきだ。それに」

「いいから離してください！」

思わず大きな声が出てしまった凧に、イリスは形もいい眉を片方だけ上げた。

「おお、怖い怖い」

おどけた調子でそう言うと、ようやく手を離してくれる。凧は自分が、どれだけ無礼な口をきいたか気づき、真っ青になった。

「も、申しわけありません……っ」

「いいよ。しつこくしすぎたのは私だ。もう行きなさい。まだ、使用人たちも寝ているだろう。今なら誰にも見咎められない。さあ眼鏡をかけて」

イリスはそう言うと、凧の黒縁の眼鏡を差し出した。言われてみて初めて、自分が裸眼で動いていたことに気づく。

「眼鏡をかけずに、よく躓かなかったね」

「大丈夫です。慣れた屋敷の中ですから」

「そう。ならよかった。気をつけて戻りなさい」

凧の素っ気ない返事を聞いても、彼は気を悪くした様子もなく頷き、毛布を引き寄せて子供のように丸まってしまった。

——でも、この喪失感に似た気持ちは、なんだろう。

本当なら解放感が先に来るはずだ。だって朝からベタベタされるのは面倒だから。

でも、イリスはなににも言ってこない。それどころか、凧に背中を向けている。その背を見ていると、不安が大きくなるばかりだ。

いつもは優しい彼だが、いつまでも優しいとは限らない。

そもそも自分とイリスでは身分が違いすぎる。こんなふうに関しく話をしたり、ましてや寝台に潜り込んだりするなど、本来ではありえないのだ。

(だって)

(だってイリス様が、抱きついたりするから)

(でも突っぱねたのは、やりすぎだったろうか。それが気に障ったのだろうか)

(それとも、もっと別の失敗をしたのだろうか)

不安は焦りを呼び、焦燥を連れてくる。人はとかく弱くて、ほんの少しの揺さぶりにも、簡単に崩れ落ちるのだ。

「凧、こちらを向いて」

名前を呼ばれて、ハッと顔を上げる。すると、目の前にイリスの顔があった。その眼差しがキラキラして、思わず目を奪われる。

(きれい.....)

碧色の大きな瞳は、夢見るように潤んでいる。

(この瞳をいつも宝石のようだと思っていたが、そんなありきたりな言葉では言い表せない)

そうだ、この人の瞳は、万華鏡だ。

以前も思ったことだが、今さらながら父にもらった万華鏡を思い出す。

きらきら光る、たくさんの色。光彩。虹の呈色。たくさんの色と光が弾く幻想的な美しさ。

父が死ぬ前にプレゼントしてくれた思い出のように、凧の心の中で煌めいている。永遠のようで、二度と同じ輝きは見られない奇跡。

やはりイリスは、彼の瞳は奇跡だ。

だって、こうやって見つめているだけで心が浮き立つ。ドキドキする。幸福になれる。

そんな宝物を持つイリスに比べて自分は、なにもない。誰かを幸福にする宝玉を、持っていない。

自分は、なにもない。

「なんて顔をしているんだ。怒っていないよ」

そう囁かれてハッと顔を上げると、イリスは身を屈めて頬にキスをした。

「大丈夫。きみは心配しなくていい。それより早く行かないと、誰かに見られるよ」

彼の言葉には、少しの揶揄も含まれていない。その思いやりに、涙が出そうになる。

(また変なことをしたのかな。.....ああ、恥ずかしい.....っ)

凧は慌てて頭を下げると、大急ぎで部屋を出た。廊下の突き当りに設置されている大きな柱時計は、四時を指している。

「いけない.....っ」

凧は従僕見習い。誰よりも早く起きて、主人が快適に過ごせるようすべてを手配する仕事。

そして凧が仕えるのは、この豪華なロンズデール伯爵家ではない。イリスだ。

伯爵家なんか本当はどうでもいい。いいや、自分のことだって、どうでもいい。ただ大事なものはイリスのことだけ。

不安でどうしようもない夜、抱きしめて寝てくれた優しい人だけが、凧にとっての世界に等しいものだった。

て、朝食の席までやってきたらしい。

凧が給仕しながらリアムに会釈をすると、彼は嬉しそうに微笑んだ。しかし、ニコールの顔は見えない。彼女が朝食に姿を見せないのは、めずらしいことではなかった。

「今朝も、ニコールはいないのだね」

イリスがそう言うと、リアムはこっくり頷いた。

「お母様はゆうべ遅くに出かけられて、まだお戻りじゃないから」

リアムの言葉に沈黙が流れる。伯爵でありイリスたちの父ヘンリーは、去年の末から体調を崩している。その夫を放って、伯爵夫人であるニコールが外泊をしていたとは。

さすがにイリスも、眉を寄せている。幼い子供の嘘がない言葉は、部屋の中の空気を凍らせてしまった。部屋の隅に控えている執事もメイドたちも、居心地が悪そうだ。

そんな雰囲気をもたれたいと、凧はわざと明るい声を出す。

「イリス様。これからご主人様に朝食をお持ちするのですが、ご一緒にいかがでしょうか。お一人の食事はお淋しいと思われまますので」

「それはいい考えだね。では朝食の準備を頼むよ」

イリスはそう言って口元をナプキンで拭い、リアムも誘ってみる。

「リアムも一緒にどうだい。きみも父上にお会いするのは久々だろう。きみが来てくれれば、父上もお喜びになるよ」

だがリアムはその言葉に、頭を振るばかりだ。

「ううん。ぼくが行くと、お父様のご気分が悪くなるから」

「そんなことはない。父上は子供が好きでいらっしゃるよ」

「.....ううん.....。小さな子供はお好きでも、ぼくのことは好きじゃないよ」

リアムの反応に、イリスは言葉を失ったようだ。九歳の子供の言葉ではないからだ。

その様子を見て、凧は努めて明るい声を出して話しかけた。

「ではリアム様は、朝食のトレイに添える花を、切っていただけませんか。温室の中の、一番きれいなお花を選んでください」

「花を？ でも」

「長く臥せておられる方を、お慰めするためのお花です。責任重大ですよ。リアム様がきれいだと思うお花を切っていただくのが、なによりものお見舞いです」

「でも、お父様はぼくが切った花なんて.....」

その言葉に凧は頭を振り、優しく微笑んだ。

「リアム様が切ったお花です。絶対に喜ばれますよ」

凧がそう提案すると、俯いていたリアムの顔がパッと輝いた。

父親が自分をどう思っているか察していても、愛する人のためになにかしてあげたい。そんな優しい心を、彼は持っていた。

「じゃ、じゃあ、ぼく、これから温室に行ってくる！」

リアムがそう言うと傍にいた執事が、「私も、ご一緒いたします」と言ってくれた。部屋を出ていく二人の後ろ姿を見ながら、イリスが小さく吐息をつく。

「助かったよ、凧」

「いえ、差し出がましく口を挟んで、申しわけありません」

本来ならば嘘は言っていない。ロンズデール伯爵であるヘンリーは、ニコールが子供を授かったと聞いて、すぐさま再婚を決めた。周囲が反対する暇もなかったという。

彼はニコールの家柄や身分の差など、まったく気にしていなかった。

嫡男であるイリスを溺愛していたヘンリーだったが、それと同じぐらい、生まれ来る子を愛して大事にしてやりたかったのだ。

英国社交界もマスコミも、このときは大騒ぎだったらしい。

ロンズデール家は広大な領地と莫大な財産を所有しているし、先祖は王室ゆかりの人物もいた。そんな名門一族の当主が世間体を気にせず身の振り方を決めるのは、極めてめずらしいことだ。

それはニコールへの愛ばかりではない。新しく授かった我が子に対する愛情だ。

我が子思いだったヘンリーが、リアムを疎んじているには理由がある。それは、生まれ落ちたリアムは、伯爵と似ても似つかない容姿だった。そして、栗色の髪に琥珀色の瞳を持っていたのだ。

ニコールは自分が英国とトルコの混血だから、その影響が出たのだと言い張った、だが、これほどまでに似ていない親子は、人々の好奇心を叩く。

それゆえに、伯爵はリアムが苦手なようだ。若く美しいニコールの不貞を疑うには、充分すぎたからだ。

「摘んできたよ！」

いつも大人しいリアムが、めずらしく意気揚々と部屋に戻ってきた。手には黄色のチューリップと、青い小花がかわいらしい花束があった。

「お父様はご病気だから、強い香りの花はダメだって思ったの。チューリップなら、そんなに匂わないよね。ねえ、凧。このお花、どうかな」

「とってもおきれいですね。黄色のお花に青い小花が散らしてあるのがすてきです。組み合わせるのが、お上手でいらっしゃる」

凧が褒めるとリアムは恥ずかしそうに微笑んだ。その様子を見て凧は、子供らしからぬ気を遣うリアムが健気だと思った。

こんなにも父親を愛している幼子が、触れ合えないのは不幸でしかない。

「きれいだね。では、花瓶に生きて父上に持っていくよ。リアムが選んで自ら摘んでくれた花だ。きっとお喜びだよ」

イリスがそう言うと、リアムはぱあっと頬を輝かせる。見ているこちらが思わず微笑んでしまうような、そんな表情だ。

「お父様、喜んでくださるといいなあ」

うっとりとして呟くリアムに、凧も思わず頷いた。

誰が親とか子供じゃないとか、そんな真実はどうでもいい。

ただ、この儂げな少年が倅せであれと、祈らずにはいられなかった。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>